

Hello!! from the UK!!～Chiko's column～



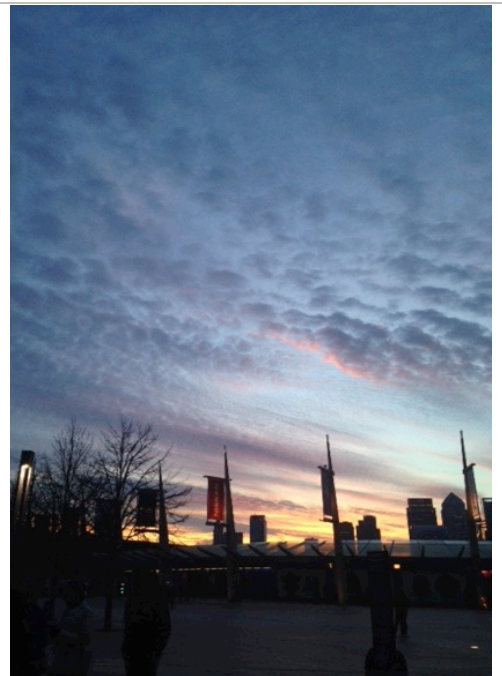
イギリスの桜↑

「なんで？」と聞く私に何人もの人が「Why not? Chiko?」と返してきました。そう、その瞬間に、私はいつも肩の力がふっと抜け、「そうだよ、どうしてやってはいけないの？ やってはいけない理由なんてどこにもないのに。」と思うのです。そして、それを思うと同時に、いつもいつも

ちゃんとした理由を探し自分を少し正当化してしまう自分に少しがっかりします。でも、それと同時にやはりこの言葉を聞いて、勇気を何度ももらっていることも確かです。「これをやったら、どうなるかな。これをやったら失敗するかな。」と迷っている自分に友達が「Why not? Chiko?」と声をかけてくれた時、なんだかパーっと前が開けたような気持ちに何度もなりました。失敗して何が悪い？ 失敗するからやってはダメなんて理由はどこにもない。なんだかそう言われているような気持ちになりました。人生、正当な理由に基づいて物事を進めていくのはもちろん素晴らしいことだけれど、「why not?」精神で進んでいった方が、自分を閉じ込めず正直に、そして人目を気にせず自分らしい道が見つかるのではないかと時々ふと思います。ひるみそうになった時に「Why not? 自分!!」と励ますこともしばしばある最近のChikoです（笑）こんなたったの2語の単語ですが、英語を話す人または英語の文化自体と日本語のメンタリティーの違いをととも感じます。こんなことをぐるぐる考えるとワクワクが止まらないのは私だけでしょうか・・・言葉って奥が深く、そして本当に面白い。今大学院でもそんなことを勉強していますが、本当にワクワクすることが多々あります。（エッセイは全くワクワクしませんが・・・）。そんなこんなで、11歳の男の子に「Why not?」と諭され、とほほな私ですが、今月もなんとか生きています（笑）

あ、そうそう、もう一つ初めての体験がありました。ルームメイトのクララ（もう何回も登場しますが）の前の職場のピストロワインバーが大変忙しく、さらに従業員が1人やめてしまったので、急遽何か私が手伝うこととなり、ホールを数日ヘルプしました！（もちろん有給！ 強気に時給交渉してみました！）というのも私の実家はイタリアンレストランを営んでおり、もちろん日本語でのレストランでの接客はバッチリ経験もあるし、接客は大好きなのですが、うーん、今回は英語だし、さらに取り扱うワインや料理もそこそこの値段だし、レストランの世界を知っているだけに、中途半端なことはできないと責任をすごく感じてしまったので、とても不安でした。まあでも、お金も稼げるし、ヘルプを引き受けたわけですが、もう週末だったせいか、本当に忙しく、頭の中は大パニック「マジで一！ 勘弁して一！」と頭の中で何度も叫びましたが、忙しいのでそんなことも言っておられず、頼まれていないことも、自分で考え臨機応変にやらなくてはいけない状況になり、もうやるしかない！ と腹を決め、サービスをしました。でもやってみると、やっぱりサービスの心遣いはどの国も同じですね。日本でやっていた時のサービス精神と全く同じように結局こなしていました。お客さんはどこでも同じ。お客さんは楽しくて美味しい時間をお金で買って、その時間を私たちが最大限にサポートし、サービスする。この考えはこちらでも通用したようです。とっても慌ただしく大変だったのですが、やりきることができ、なんだか自信になりました！ お金もいただけたし、感謝されたし、苦情の口コミもなかったし（冷や汗）、一件落着です！

と、こんな感じでまた今月末にエッセイの締め切りが迫ってきて、頭をかきむしりながら、叫びながら、今日も図書館に来ているChikoです！ さて、4月！ 日本は新学期ですね！！ 花見がしたいなあ！ では、また来月号で！



イギリスの夕暮れ↑

元気が出る!! 今月のおすすめの一冊。

今月のおすすめの一冊



フランス渡航前に26歳の小西さんが自分で作った十戒

- ①人生に近道はない
- ②手繰り寄せる行動をとる
- ③どんな時も前を向く行動力を持つ
- ④全力で取り組む
- ⑤何をやるにも舞台は世界だ
- ⑥凡事徹底
- ⑦とことん考えて天地自然の理に従う
- ⑧本物を見続ける
- ⑨損得ではなく、常に善意で生きる
- ⑩必ず世のため人のために生きる

みなさんこんにちは、小林です。4月ってなんだかウキウキしますよね! まずはお花見、そして街にはちょっと大きめの学生服を着た学生さん、初々しく希望に溢れた表情の新社会人が集団で歩いていたり…。そんな人達を見ていると、なんだかこちらでも何か新しいことを始めたくくなります。そんな4月にぴったりの1冊、『扉を開ける 小西忠禮(ただのり)の突破力』高久多美男著。小西さんは日本人で初めてパリのリッツで働いた伝説のシェフ。超一流のレストランで修行し、フランス料理人として世界最高峰の舞台で活躍。しかし60歳からは、なぜか幼稚園の経営に携わり、未来の日本を背負う子どもたちの為に尽力するのです。「一度の人生で二つの達成感を味わうことができる。小西忠禮が選んだ人生のスタイルは、長寿社会に生きる我々に貴重な示唆を与えてくれるのではないかと」と本の帯にありますが、読む人の年齢によっていろいろな感じ方ができるんじゃないかなと思いました。と言うのもこのノンフィクションは、小西さんの輝ける経歴だけではなく、生誕から彼がどんな風に生きてきたかが書かれているからです。一言で言えば、その生い立ちには逆境。

小西忠禮は1941年、激動の時代の真っ只中神戸市灘区に生まれます。終戦の翌年、父親が他界(小西、当時5歳)。一家の大黒柱を失った小西家は生計を立てるすべを失い、病弱の母親も父の死の10年後に他界してしまいます(小西、当時中学1年生)。小西は歳の離れた兄の家庭に「新聞配達のアパートをしながら」と言う条件で同居を許されます。高校に入ってバレーボール部に入りたいと目標を定めた小西は、早朝3時起きで徒歩での配達を続けながら勉強にも精を出し、公立神戸商高に合格。高校に入ってからバレーボール一色。あるとき先輩から「おい小西、誰もやらんことをやれ。(それは)左右どっちでも打てるようにすることや」と言われ、ひたすら練習を重ね、アタッカーとして全国どこにもいない二刀流を自分のものにしてしまいます。神戸商高は県内有数の強豪校だったが、県大会ではベスト4どまり。全国制覇の夢が断たれ落胆する小西。そんな時、朗報が届く。社会人ナンバーワンの松下電器産業と大学ナンバーワンの関西大学からスカウトが来るのです。将来どうするか決めかねていた小西は、とりあえず合同合宿に参加してから身の振り方を決めようと考えます。しかしそこで待ち受けていたものは「女の子の黄色い声援」。こんな世界にいたらダメになると感じたのに加え、選手としての成功の確率や華やかな時代の短さを考えると、目先のことに浮かれるのではなくしっかりと自分の人生を考えようと思った。だからと言って他に夢があるわけでもない小西は、進路指導の先生に言われるまま、日立の家電販売会社に就職。しかし社会人になって早々、大量に製造された家電品を売り歩くことに喜びを見せず、「これは自分のする仕事じゃない。他に自分の役割はないやろか。食べることが好きなんやから、料理がええかもな」そう考えた小西は4年足らずで退社。大阪の天六日本調理師専門学校に入り1年間みっちり学びます。そこで校長の辻勲がいった次の言葉に触発されるのです。「これからは、グローバルな社会になる。舞台は世界だ。パリのリッツは世界一」。その後、小西

はことあるごとに「パリに行って、リッツで働く」という自分の夢を語るようになります。固定相場制で渡航でさへ難しい時代、周りからはもちろんその度に嘲笑されたのですが、そんなことは眼中になし。こうして小西さんは、1963年、22歳の時、料理人としては遅いスタートを切ったのです。

ざっと小西さんが料理人としてのスタート地点に至るまでをまとめてみましたが、この青年の22歳までを見て、この人がフランス料理界の超一流の料理人になるとは、たぶん本人も含めて、誰も予想できないのではないかと思います。だからこそ、自分の前に起きた出来事をどう捉え、これからの行動にどう移していくのが大切なんだと思いました。紙面左上の彼が作った十戒に詳しく書きましたが、彼の行動には起こる出来事に対する一貫した捉え方と行動原則があります。目の前に出てくる問題を壁ではなく扉として考えること。苦境のように感じる場に立っても、その場から学べる場所を見つけようとする前向きさ。そして今の自分にできることに全力で取り組む愚直さ。それに対して書かれていなかったことは、恨みごとや言い訳のたぐい。実際の行動は地味で地道なのですが、誰もが応援したくなるほど爽やかなんです。手に入れること自体を考えるよりも、どんな風に突破していくのかの方が、むしろ大切なのではないかと思います。

2冊目は『小春日和』喜多川泰著です。ぜひ『扉を開ける』と一緒に読んでいただきたい作品です。特に女性にはオススメです! 主人公の那須美輝(なすみき)の14歳と28歳の時に起こる事件(?)、いじめと女性としての幸せと自立について、それをどう突破していくかがテーマです。まずイジメについてです。「認められて、感謝されること」この2つの経験ができる自分の居場所があるから学校に行ってみようと思う。学校の中で人間関係がうまくいかなくなると、多くの子は、その関係を取り戻そうと必死になるがうまくいかない。そうして家に帰ると一人悩む、誰かと出会っても一人悩んでいる。人間関係がうまくいかなかった子たちとは別に、自分の行動によって「ありがとう」という言葉をかけてくれる人は沢山いるはずなのに、それをしようとしない。「何もしてないのに、どうして自分がこんな嫌な目に遭わなきゃいけないんだ」と考えてしまう。そう「何もしていないのに…」つまり自分からは、人からありがとうと言われることなど「何もしてない」から、人から認められたり感謝されたりする機会すら、目の前を通り過ぎてしまう。もちろん人から認められることは、必要で大切なことだけれど、待っているだけでは手に入らない。でも自分を変えることは今この瞬間からできる。「ありがとう」と言われることは、自分の行動によってどんどん増やしていくことができる。人からありがとうを言ってもらえることを沢山するから、結果、人から認められるようにな



って行く。こんな考え方もイジメ突破の一つの方法かもしれませんね。もう一つのテーマは、女性としての幸せと自立。深いです!!「周囲の作り上げる自立した女性像に合わせるように自分の生き方を変えてきたのかもしれない」pg.155. もしもこの言葉に引っかかったなら、多分オススメです! 小林義和

Collocation について

今月号は Collocation についてです。Collocation(コロケーション)と言うのは文法用語では『連結語句』とか『連語』等と呼ばれていますが、つまりは相性の良い単語同士の繋がり、よく使われる組み合わせ、自然な語のつながりです。この繋がりを沢山覚えてしまえば、よりネイティブの英語に近づける! という事なのです。Collocation はどんな言語にもあると思います。例えば、日本語で「計画を立てる」と言いますが、英語では Make a plan. 日本語で「計画を作る」と言うとなんか変です。そう、日本語の通りに英単語を繋げるとネイティブにとっては変な響きになる時があるのです。例えば、「辞書を引く」と言うのも、look up in a[the] dictionary. 「スケジュールを調整する」はadjustではなく arrange the schedule 日本語では「スケジュールをアレンジする」って

なんか変ですが英語では Sounds right!なのです。では、「空気を読む」はどうでしょう? 今、Read the air! って、頭に浮かびましたか? 笑 日本の文化を知らない英語圏の方が聞いたら、「はあ?」と言われそうです。実際は、Read between the lines! “line”というのは行の事、つまりは行間を読む、「(書いてある)言葉以外を読む」となります。又は、take a hint とも言うようです。S+V+Oの動詞が入る例を書きましたが、adjective(形容詞)+noun(名詞)の場合もちろんです。強い雨は strong rain ではなく heavy rain、逆に強い風は strong wind です。こうなったら、映画でもなんでも、とにかくネイティブの英語を聞いて、より沢山の組み合わせを覚えるしかないですね! ちなみに Collocation の辞書や単語帳もありますので書店やオンラインショップで見てください。Rie